ふりむけない

たかはしおさむ

人生はドラマチック
だから　信じていられる

過去に残してきた後悔が
何かの拍子にポロっとこぼれて
チクチクとこころを刺す

ぼくはその後悔に向かってひとこと言う
「きみはいつも新鮮だね」

すると後悔は
別の場所を細い針で刺しながら答える
「あなたが新鮮だからよ」

誉められたぼくは少し気分がよくなって
後悔が刺した場所を抱きしめる
すると・・・
いくつかの言葉が空から落ちてきた

思い出の中のぼくは
今　どんな顔できみを見てる？

消えることができない

目の前の交差点を渡ると、すぐに急な坂道が待っている。息を切らしながら坂道を上れば、またすぐに次の交差点。この交差点を左に曲がる。

ぼくは駅に向かって歩いている。私鉄に乗って、大きな街まで出かけなければならないからだ。

長い長い住宅地の中を、道なりにゆっくり蛇行しながら進んでゆく。やがて左にこんもりと神社の杜が見え、その静かな道を玉垣にそってゆっくり回り込んでゆくと三つ目の交差点に出る。

この交差点を今度は右に曲がる。ここからは古い商店街が駅前のロータリーまで続いている。

ぼくは商店街を抜けたところの信号で立ち止まり、ふと見上げる。すると目の前に見えるはずの駅のロータリーが、急な坂道に変わっている。少しだけ不思議に思いながらもぼくは、またその坂を上る。

坂を上りきるとすぐに交差点があり、左に曲がって住宅地の中を歩いてゆく。やがて神社の杜が左手に見え、その玉垣を回り込むように進むと、そこには交差点。

そこをぼくは右に曲がり、商店街をためらわずに進む。商店街を抜けた信号で立ち止まり、駅があったはずの場所の坂道をまた上ってゆく。

同じことを何度か繰り返し、何度目かの坂道できみとすれ違う。きみはぼくに気づかない。気づかずに交差点まで下って、そして消える。

きみの消えた場所でぼくはしばらく佇み、消えることのできない自分を知る。

そこにいたことにも気づかなかった
背中合わせ

うまく笑えない

多面体というのは身の回りにそれこそ溢れるほどあるけれど、正多面体といわれるものは五種類しか存在しない。

正四面体・立方体・正八面体・正十二面体・正二十面体

他はみんな不揃い。サイズが違ったり、形が違ったり。だから人間が不揃いな多面体であってもなんの不思議もない。

人間は、どこかの面とどこかの面を触れ合わせて社会を作ってゆく。「触れ合い」は「振れ合い」。振れ合って共鳴し合うわけだ。

サイズや形が違うから共鳴音にもいろいろあるので、ぼくみたいにどの面がどういう感情を表しているのかよくわからない者は困ってしまう。

共鳴する場所が、たまたま背中と背中だったら・・・少し悲しい。やさしい声は聞こえるけれど、きみがどこを見ているのかわからない。わからないから、うまく笑えない。

きみとぼくの間には
海が広がっている

会いに行けない

たとえば、ここは川だと思っていた場所がいつの間にか海に変わっていたら、びっくりだ。川の向こうに住んでいたきみに会いに行けない。

ぼくは小さな船できみを探す航海に出る。手がかりはきみが好きだった歌と、夜空の星だけだ。

やがてぼくは痩せこけて、どこかの島に打ち上げられる。

太陽がジリジリと照りつけ、たまらなくなって目を覚ます。這うようにして緑の中に逃げ込み、ほっと息をつく。

夜になると溢れるような星のひかりが降り注ぎ、ぼくはきみの好きな歌をつい口ずさんでしまう。

波が刻み続ける海の呼吸を聞きながら、やがてぼくはそのリズムに合わせて静かな永遠の眠りにつく。おやすみなさい。

傘がなくて　帰り道はひとり

前にしか進めない

帰り道で雨に会った。雨に打たれながら、それでも何故か安心していた。こころを洗い流してもらっていたのかもしれない。そんな時に傘に守ってもらうわけにはいかない。

ぼくが心地よさそうにしていると、雨もいい気になってだんだん強く降りはじめる。さらにどんどん強くなって、どしどし強くなって・・・とうとうぼくはその場にへたり込んでしまった。

結局それでわかったことは、ぼくの背負ってる罪はどんなに強い雨でも流すことはできないってこと。

仕方なしにぼくはヨロヨロと立ち上がり帰り道を探す。ところが、気のいい雨はぼくの罪を流さずに、帰る場所を流してしまった。

帰る場所を失くしたぼくは、それ以来・・・前にしか進めない。

「捕まえたよ」
「見せて」
「だめ　手を開くと消えちゃうから」
「見せてよ」
「だめ」
「もう」
「だめだって　あ・・・」
「あ・・・」
「ほら　消えちゃった」

流れない

時の流れを目の前で輪切りにする。するとぼくの右手には過去が残り、左手には未来が横たわる。その過去と未来を両手に握ったまま、ぼくは考える。

と、いうことは・・・「今」はどこにあるのだろう。

過去と未来を四方八方から探してみても見つからない。人は「今」を生きるというけれど、その「今」が見当たらない。

仕方が無いので、過去と未来をもとに戻してみた。

・・・あ

そのとき気がついた。「今」は、ぼく？

「今」は過去にもあり、未来にもあって・・・「今」は流れない。流れずに上のほうから、時の流れをじっと見つめてる。

忘れない

忘れない

また何処かの未来で、きみと出会えると思う。けれどひょっとすると、そのときお互いが何者なのか判らないかもしれない。そういうことはよくあることだ。

きみがぼくに気づいてくれるように、ぼくはぼくの歌を唄っていようと思う。だからきみもきみの歌を唄い続けてほしい。

そしたら・・・だから、未来にいるはずの「今」のきみに、声を掛けることが出来ると思う。その時まで、きみを忘れない。

ホンロード

エピローグ

時空の正体は時空の外に出てみるとたぶんよく見えると思う
時空の外に出るには
きっと重力から自由になることで・・・もちろん身体もこころも
精神や知識も
常識や非常識さえも
さらにみんなみんな・・・何者にも捉われない状態だと思う
それは五次元にあって
何処にも流れない世界なのだろう
そこに　ぼくを見ている更なるぼくがいて
彼が　これを書かせたのだ
けれどぼくはこの世の言葉や文字しか知らないので
充分には表現できていない
まだまだ勉強だな・・・と思っていると
あちらのぼくは「勉強じゃなく訓練だ」と言った
勉強も訓練も
どうしても苦手なぼくは
ふらふらとまた何処かへ写真でも撮りに出かけよう
どこにでも転がっている「今」を探して